

学位記伝達式 学類長祝辞（2018.3.22）

今、学位記をお渡しした皆さん、あらためてご卒業おめでとうございます。

そして、入学以来、留学や海外語学研修などで海外に出かけることも多かった卒業生たちを温かく見守って下さった保護者の皆様にも心よりお祝い申し上げます。

今年度は、国際学類の7回目の卒業生として、計63名の皆さんを社会に送り出すことになりました。国際学類らしく、その過半数の34名が留学等の関係で5年での卒業となりました。そして、大学院進学者などを除くと、昨年が続いて就職率100%という結果だったと聞いています。

入学直後の新入生オリエンテーションや新歓合宿の頃の皆さんを思い出すと、今こうして大学での4年間あるいは5年間の様々な経験を経て逞しく成長した皆さんを目の前にして、本当に嬉しく思います。

さて、国際学類は発足以来、その人材養成の目標を次のような言葉で表現してきました。

「グローバル化が進んだ21世紀に、国際社会への洞察力を持ち、異文化との〈しなやかな共生〉を実現できる真の国際人を育成することを目的とし、外国・異文化への探究心、コミュニケーション能力を持ち、将来国際的業務で活躍できる人材を育てる」

本学を築立つにあたって、今一度、国際学類がずっと大切にしてきた、「異文化との〈しなやかな共生〉」という言葉に心を刻んでください。

<異文化>とは海外の異文化だけではありません。日本国内においても、様々な異文化が存在しています。そして、そうした<異文化>には、見えやすいものと見えにくいものがあります。これからも、様々な人との出会いを大切にしながら、見えにくい<異文化>も理解できるような力を身につけて下さい。

「玉磨かざれば光無し、玉磨かざれば器(き)をなさず」という言葉がありますが、知っていますか。どれほどすばらしい宝石でも、原石のまま磨かなければ光りもせず、りっぱな器(うつわ)にもならないという意味です。宝石の原石である若い皆さんは、決して奢ることなく、常に謙虚に、玉である自分を磨き続ける努力を怠らないでほしいと思います。

21世紀に入ってはや20年近くが経とうとしていますが、この間、世界のグローバル化がますます進む一方で、それに逆行するような動きも様々に見え始めています。

世界大戦を二度も体験したにも関わらず、悲しいことに、未だに地球上から紛争がなくなることはありません。皆さんの多くは、4月から社会人として新たなスタートを切るわけですが、その前途には楽しいことばかりではなく、節目節目で様々な壁が立ちだかるかもしれません。でも、国際学類で学ぶ中で、世界に多くの友人を持ち、広く逞しい心をはぐくみ、豊かなコミュニケーション力を身につけた皆さんなら、そうした壁も乗り越えていけると信じています。

今年度は、2008年度に国際学類が発足して10年という節目の年でした。先週の土曜日の午後には、市内西町にある金沢大学サテライトプラザで2017年度金沢大学国際学類サロン「国際学類のリニューアル～国際学類10年の総括と展望～」を開催し、国立大学の国際系学部の先駆けとして25年近い宇都宮大学国際学部長の佐々木先生をお迎えして、宇都宮大学国際学部の現状と課題について教えていただくとともに、我が国際学類の10年を振り返り、今後について考える機会を持ちました。その中で、今後に向けての課題も見つかると同時に、10年間に作り上げてきた国際学類の伝統や良さにも気づくことができました。そして、その日に我々教員間で改めて確認しあったことが、国際学類の財産は皆さんのような卒業生と在学生だということです。

これからの国際学類がさらに発展するためには、学類の財産である皆さんの応援が必要です。国際学類の卒業生は、こんな様々な分野で活躍してくれているということ、これからは大いにアピールしていきたいと考えていますので、これからも何かお願いすることがあったら、快く協力していただきたいと思います。

今日、卒業するにあたって、この場にいる皆さんの一人でも多くの方が、金沢大学の国際学類で学べてよかった、そんなふうに思ってお下さるならば、私たち学類教員にとって、これ以上の喜びはありません。

最後に、皆さんにお願いがあります。

皆さんには、卒業してからも、先輩や後輩、そして私たち教員との絆をいつまでもつないでいただき、ずっと国際学類の応援団でいてほしいと思います。毎年秋に開催される国際学類同窓会にもぜひ参加して、さらに成長した姿を見せて下さい。また、いつかお会いできることを楽しみにしています。

合わせて、皆さんの今後のご多幸とご活躍を心よりお祈りして、お祝いの言葉とします。おめでとうございます。